

チェルノブイリの子どもたち

チェルノブイリ子ども基金 NEWS No77 2009 年 6 月 27 日 発行



チェルノブイリ 23 周年救援キャンペーン

広河隆一

チェルノブイリ最新情報



4/20 文京シビックホール 小ホール

須山真怜

ピアノ「チェルノブイリ鎮魂曲」



〔写真提供：ky 生さん〕

朗読「プリピャチの観覧車」ほか

石川逸子



廃墟となったプリピャチ市

原発のすぐ近くには、プリピャチという、新しくできた原発労働者の町がありました。いろいろなことが優遇されていて、プールや子どもの文化施設などがふんだんにある、豊かな町でした。プリピャチはバラの花が有名で、街を紹介するパンフレットやカレンダーも、バラの花で満ち溢れていました。プリピャチには約 5 万 5000 人の人が住んでいました。そのときプリピャチには旧ソ連軍が駐留していましたが、それがどの位の部隊だったのかもわかりませんし、兵士たちはそのまま事故処理に借り出され、その後、また各地へ散らばってしまっています。（広河隆一最新報告より）

23 年目のチェルノブイリ

2009 年 3 月撮影 報告 広河隆一（前篇）

今回、ウクライナの汚染地には 3 年ぶり、ベラルーシには 4 年ぶりに行きました。これだけ期間が空いてしまったのは「DAYS JAPAN」の編集に時間が取られていたためでもあります、事故からこれだけ時間が経ったのだから、事態はそれほど深刻化していないのではないかと、科学者たちがそんなことを言えば「絶対にそんなことはありません」と言っていますが、私の心のどこかでそんな気持ちがあったのも事実です。

プリピャチの街のお墓の辺りから原発が見えますが、この辺りはいまでも放射能にものすごく汚染されていて、立ち入りはなかなか許されません。現在はこういうようなお墓はありませんが、事故直後に亡くなった、消防士や原発運転員の方々は最初、そのまま土の中に埋められていました。

しかし、人間の体がそのまま放射性物質のようになって放射能を発し続けるわけですから、これではあまりにも危険だということで、いったん掘り返されて、金属製の棺の中に入れ直されて、埋葬されました。土にそのまま遺体を埋めただけでは、墓の周囲がどんどん放射能で汚染されていってしまうからです。

国際原子力機関（IAEA）の調査

1990 年から 91 年にかけて、国際原子力機関（IAEA）が大掛かりな調査団をチェルノブイリに派遣しました。チェルノブイリ事故というのはどのような状況なのか、危険なのか、危険でないのかを調べるために、世界中の科学者・医学者たちが集められました。その報告は 91 年に発表されましたが、それは、

「チェルノブイリ事故被災地では、子どもたちの病気が多発するということはありません、ガンは増えないだろう」「被災地で汲む水も採れる食べ物にも問題はない」と

いった内容でした。

IAEA は調査中から、病気は心理的なものが原因だと説明していました。事故はコワイ、コワイ、大変だ！と思うからノイローゼになるのだと。現地の医者たちはびっくりして、ならば、毎日毎日この病院に詰め掛けてくる子どもたちの病気をどう説明するのだ、と抗議しました。そのころはちょうど、小児甲状腺ガンが大量に発生した時期でしたので、現地の医者たちはその事実を調査団に訴えたのですが、調査結果の項目からは消されてしまったのです。

この調査団の団長を務めたのは日本人の広島医学者でした。広島の間が調査団団長になれば、被害者の身になって調べてくれるだろう、少なくとも嘘はつかないだろうと現地の人たちは考えましたが、裏切られたわけです。

それにより、早期発見・早期治療の機会が奪われました。また、大したことがないのなら、これ以上援助する必要はないのだろうと、世界から寄せられていた援助物資も滞ることになりました。こうして、チェルノブイリは忘れ去られていく時期を迎えます。

ターニャ

事故から 10 年、ターニャが足の痛みを訴えたのはそういう中でした。しかし、ターニャの足の痛みと事故を結びつける人は、周りにはいませんでした。やがて、体中に痛みが広がり、精密検査を受けて初めて、これが喉の甲状腺ガンから始まり体中に転移しているせいだということがわかりました。



喉には甲状腺という人間の成長をつかさどる器官があります。養分はヨウ素です。ワカメなどの海産物に含まれていますので、海に囲まれよく海産物を摂取する日本人の甲状腺には、たえず

ヨウ素が蓄えられています。内陸部にはその習慣がないために、ヨウ素が現れると、人間の体は、ヨウ素を早く体の中に吸収しようという動きを起こします。ウクライナやベラルーシの汚染された地域は、そのほとんどが内陸部に位置していますので、事故で発生した放射性ヨウ素を、体は、健康のためになるヨウ素だと勘違いして取り込もうとしました。これまでの人類の経験の中に放射性ヨウ素という物質はありませんでしたので、放射性ヨウ素が発育促進に必要なものだと体は反応して、小さな子どもほど多く受け入れていったのです。そして、放射性ヨウ素を吸収した喉は原子炉のように放射能を発するほど被曝し、何年か経ってガンになっていくわけです。

ターニャも、甲状腺ガンが全身に転移して、最後は脳に転移して亡くなっていました。この撮影から2か月弱後のことでした。

30 キロ圏内



埋葬された村の跡には墓標が立てられ、村の名前、住んでいた人の数、埋葬の日付が明記されています。放

射能で汚染された家は壊されて土に埋められます。これを埋葬と呼びます。火事になったりすれば煙は放射能を帯びて移動しますし、人の住まなくなった家から盗まれた家財道具やトタン、材木が、街で黙って売られてしまうということが度々起きているので、放射能が外に出ないように嚴重に取り締まっているわけです。しかし、お金がないために、すべての汚染された村が埋葬されているわけではありませんし、壊すのにお金がかかるレンガやコンクリートはそのまま残されている所が多くあります。

汚染地図の一番外側の円を30キロ圏（ゾーン）と言いますが、まずはこの圏内が立ち入り禁止となりました。しかし、KGBは、それ以外の地域がどの位汚染されているのかを隠しました。チェルノブイリ原発の北方に高濃度汚染地域があり、世界中のジャーナリストや雑誌、新

聞がこの地域へ取材に行こうとしていました。しかし当時、こういう地域を訪ねるにはその訪問先の地名が書かれたビザが必要で、メディアは皆、モスクワでビザが出されるのを待っていましたが、なかなか許可は下りませんでした。私はキエフでKGBと交渉し、やっと汚染地域に立ち入る許可を得ました。

チェルノブイリ原発4号炉

事故の起きたチェルノブイリ原発4号炉は、その内部がいまにも崩れそうになっていて、内部の補強工事が行われています。工事をするときは放射能が外に漏れてきますので、放射能検知器の値がすぐに上がってきます。

現在、4号炉の隣で4号炉全体を包むドームの建設が進められています。隣で組み立てて、4号炉まで移動してきて被せてしまおうというプランです。どの国が建設費を出し、どの企業が工事を請け負うかなどをめぐって揉めていて、なかなか前に進みません。一番有力と言われているのは、フランスの原子力産業の工事を請け負っている会社です。

写真は数百メートル離れた反対側から4号炉を撮りました。20年前、ここで放射線検知



器のスイッチを入れたら瞬く間に針が振り切れて、驚いた記憶があります。原発事故における放射能の値、恐ろしさを初

めて実感した場所です。手前に発電所の白い建物があり、その奥に原子炉があります。

4号炉は壊れ、3号炉、2号炉、1号炉もすでに運転が中止されていますが、各原子炉内には放射性物質が残っていますので、監視が必要です。1人か2人の監視員がずっと交代で番をしています。



30キロゾーンの検問所から入って、最初にザレシエ村という村があります。避難するとき、泥棒が侵入して家財道具

などを盗まないように家の窓や扉には板を貼り付けていきましたが、いまは家の中も荒れ放題です。

コロゴド村には、よほど慌てて逃げ出したのか、23 年経っても置き去りにされた義足がそのままありました。窓辺に一体の人形だけがありました。逃げた人が置いていった物なのか、後から入ってきた人が置いた物なのかはわかりません。こういった廃屋に残された物は放射性物質を帯びていて、ものすごい埃とともにプルトニウムやストロンチウムなどが舞う可能性がありますので、柱などもなるべく触らないようにしています。周りに積もっている埃とだいたい同じようなものであれば、人形は長い年月置かれていた物だとおおよそわかります。

原発から約 17 キロの所にステチャンカ村という村があります。この村は放射能を含んだ煙の通り道となりましたが、住民たちはそのことを知らされませんでしたので、事故の後も 1 週間位留まったままでした。原発に最も近い町プリピャチの住民の避難が始まったのは、事故から 2 日目でした。ステチャンカ村には生まれたばかりのアレクサンドラという女の赤ちゃんがいました。やがて、甲状腺ガンを発症して手術をすることになります。子ども民族音楽団「チェルボナ・カーリーナ」の一員となって、一度日本に救援コンサートに來たことがあります。

廃墟となったプリピャチ市

原発のすぐ近くには、プリピャチという、新しくできた原発労働者の町がありました。いろいろなことが優遇されていて、プールや子どもの文化施設などがふんだんにある、豊かな町でした。プリピャチはバラの花が有名で、街を紹介するパンフレットやカレンダーも、バラの花で満ち溢れていました。プリピャチには約 5 万 5000 人の人が住んでいました。そのときプリピャチには旧ソ連軍が駐留していましたが、それがどの位の部隊だったのかもわかりませんし、兵士たちはそのまま事故処理に借り出され、その後、また各地へ散らばってしまっています。

事故が起きたときに真っ先に召集されたのは、町の役所の人などでした。彼らが、住民の避難

にバスが何台必要だとかの指令を出し、ウクライナ中からバスと運転手がかき集められてきました。事情を知らない運転手たちは、ものすごい放射能を出し続けている原発のすぐ横にバスを停車して、1 日、2 日、準備をしながら出発のときを待ちました。

そばを流れるプリピャチ川はかつて高速船が通り、キエフまで通じていました。その波止場にはカフェがありました。街の幼稚園の壁には、23 年前、もしくはもう少し前に描かれたコウノトリやフクロウ、子どもの絵があります。廊下の壁にはレーニンのポスターも貼ってありま



す。おもちゃが散乱したままで、壊れた人形なども置き去りになっています。

現在、稼動している作業所（洗濯工場）がひとつだけあります。ここで、原発で働く人の衣類やカーテンなどを普通の洗濯機で洗い、さらに放射能の除染をするそうです。

文化会館には人間の歴史を描いた大きな壁画があります。科学者たちが素晴らしい何かを見つける、それは原子力。科学の進歩は人間に幸福をもたらすという絵です。

案内してくれた救援団体のスタッフが住んでいた家に行きました。彼女は、事故のとき原発の運転員でしたが、事故の当日はたまたま現場を離れていて、大きな被害を直接受けずに済んだそうです。

原発から 16～17 キロメートル離れた所には、チェルノブイリという古い歴史ある町があります。写真の人は最近までチェルノブイリ原発で働いていました。彼は、関節から病気が発生し、つい最近、脚を切断しました。政府から義足を



あてがわれたけども、ものすごい力を入れなければ膝を曲げることもできず、使えないとこぼしていました。（次号につづく）

ゴメリ「困難の中の子どもたちへ希望を」パホモワ代表に聞く

団体について

現在「困難の中の子どもたちへ希望を」の団体には375人の病気の子ども（18歳未満）が登録している。以前は、甲状腺ガン発症のケースが最も多かったが、現在は幼い子ども（1歳半、2歳ぐらい）に他の異常や腫瘍が多くなってきている。特に脳腫瘍の発症が増えてきた。また、肝臓、血液、骨などの腫瘍が発症するケースも多くなり、保健省などのオフィシャルな機関が宣伝する「他の原因」もあるにもかかわらず、これはチェルノブイリ後の影響だと確信している。どうしてそう思うのかというと、組織に登録する際、障害がチェルノブイリのせいで発症したという証明書をお母さんたちは持ってくるからだ。

団体や両親が直面する困難・苦勞

2008年12月から過去に甲状腺ガンがあった子ども（障害者3級）の特典（薬品代・交通費・光熱費の割引など）は廃止された。私たちがそれを取り戻そうとしたら、こちらを黙らせようという状況に遭った。特典が廃止された理由は国の経済的な状況だと考えられる。国の将来であるその子どもたちの生活状況はいかに大事なのかという書簡をさまざまな機関に出した。もう一つの問題は、甲状腺の手術を受けた子どもはその障害が一生の障害になり、精神的な負担になるということだ。また、その子どもは18歳になって、最低障害者補助金（約92\$）をもらっている。これは生活にはとても足りないが、多くの人は健康上の理由で就職もできない。そして、病気にかかった多くの子どもは田舎に住んでいる。病院に行くための交通費等（約36\$）がかかるが、これを負担できない両親も多い。長期間、診断や治療を受けられず再発して手遅れのケースもある。父親がアル中で、母親が働いていないという家庭や化学治療を受けている子どもと一緒に母親は長期間に家を離れ、最終的に家庭が崩壊し、母親は一人で子育てをすることになってしまうケースもある。

甲状腺の手術を受け自分の子どもにも健康問題がある若者

手術を受けた多くの若者はまだ自分の家族や子どもがいない。しかしすでに結婚していて、自分は甲状

腺ガンがあって、子どもも病気にかかったという両親18人が団体に登録している。手術を受けて、組織に登録された子どもは約400人。そのうちの100人以上は結婚している。結婚せずに子どもを生んだ女の子もいる。

団体に登録するために何が必要か

2006年から登録できる子どもの病気のリストを追加した。つまり、汚染地に住んでいる先天性障害者の子どもが提出した診断証明書類や記入したアンケートで、団体の執行委員会は登録許可を検討する。必ずしもチェルノブイリ認定があるとは限らないが、腫瘍病・血液病だけに制限している。

人々の健康状態

統計データを調べなくても、周りにいる家族を見ていたら、健康状態が悪化したとすぐ分かる。特に心臓病、関節や骨の病気、免疫の低下がよく見られる。経済状況で食生活はあまりよくなく、ビタミン剤などを買えないから、病気の予防などはできず、子どもが腫瘍病にかかって、親も病気にかかる家族もいる。また、大人や子どもの結核が問題になっている。そして、女性の場合、生殖器官の腫瘍病の発症率が高い。ゴメリ州の統計データを見ると、心臓病を上回って、第一になっている。医者も増加しつつあると認めている。過去に病気になった子ども自身はお母さんになり、また病気の子どもの生むということも非常に心配している。

これからの活動

全ての活動はスポンサーの支援に依存しているので、各家族に子どもの医療・保養の援助できるスポンサーを探すという一つの活動の方向である。これだけ病気の子どものがいるとはっきり分かっているけど、新しいスポーツ施設やスーパーマーケット等を建設する費用があるのに、チャリティ活動を行わないよう大統領の命令があると言って支援しない自分の国の企業のことを悔しく感じる。だから汚染地に住んでいる子どもの問題を理解し、いつも助けてくれるチェルノブイリ子ども基金に改めて感謝する。

聞き手 広河 隆一 2009. 3. 21 ゴメリ市・団体事務所

チェルノブイリ原発事故23周年 各地の集い〔報告〕

広河さんありがとう！

三好 鐵雄

津センターパレスB1 津まん中交流館 4/19

この度の報告会は、いろんな方々に「ありがとうございました」と、感謝せずにはおれない思い一杯の盛会でした。実に、たくさんの皆さんによる労力の結集が、補助イスを20も追加する結果（80名弱）を招きました。

しかし、今回だけは異例ですが、（報告者）「広河さん」に、特別な思いでこの挨拶をさせて頂きたい。その訳は、昨年まで愛顧頂いたりサイクルショップ（トータル三千万円募金）を閉店し、僅かの運営委員たちだけで、募金活動を再活性化させる方途に不安を抱えていたからです。それよりも、からだが三つも四つも必要な広河さんに、51回目の現地訪問を要請した側の一人として、中途半端な時間を失わせたくなかったからです。

広河さんの現地報告は、目に見えない放射線被曝という【事実】を、現在から過去へと逆上り、そこから確実に結果される将来への予測をする、真に魂に響き来るものでした。

チェルボナ・カリナやナターシャ・グジーと同行しての報告会も何度かさせて頂いた私でしたが、今回は、オープニングに、三重の当会で少女時代からお手伝いして下さってきた、中世古愛（歌手）さんと妹の楽さんによる（とても、心に響く）歌唱も爽やかで、続いて、体調不良にもかかわらず、90分間立ちっぱなしで語られ、質問に答えられた広河さんの姿勢に、人前で話す側の人間（牧師）としても胸打たれ、圧倒されるものがありました。

殊に、14歳で来日し、一か月間ホームステイ（チェルノブイリ子ども基金・奥羽）でお世話させて頂いたNさんの、結婚され、出産を間近にされているスライドを目にできたことでは、私個人としても、もう一度「広河さんありがとう！」と、感謝いたします。

（三重・チェルノブイリ被曝児童救援募金 代表）

春遅き地への思い

稲葉 純子

文京シビックホール 展示室 チェルノブイリ写真展／ウクライナ刺繍／語り 4/13～4/15

その地は、8千キロの彼方、事故の記憶も時の流れとともに遠のく。でも、私たちは、その後を生きる人々と共に生きている。増え続ける原発や、核燃料再処理の問題を抱えながら。

チェルノブイリ子ども基金は、現地の人たちの顔が見える事業を続けていますね。写真展でも、多くの顔と生きる姿が紹介されました。「核は分裂し連鎖と破壊を生み、人間は親和と愛で結びつく…」との思いを、今年も新たにしたことです。

私が2004年に、聞き書きを集めた、『チェルノブイリの祈り』から、「消防士の妻」の話を、「リュドミーラ・イグナチェンコの話」として再話した“語り”は、聴き手を得る上でこの上ない機会である、記念イベントの写真展の一隅を与えられて、2年目になりました。

何度語っても、聴き手との出会いは、その都度一回切りのもの。

「この人類史上最悪の災禍を、知って下さい、聞いて下さい。忘れないでいましょう、この事実を、この人を…」と。聴き手の驚き、悲痛な思い、怒りのような感情を受けとめつつ、「辛いですね…」というメッセージを送る。事故後の主人公たちの過ごした濃密な時間が、凝縮される。

昨年、基金のボランティアの方が主催の集いで放映されたテレビ番組のVTRで、リュドミーラさんとその息子さん、ライターのアレクシェーヴィッチさんの姿を目にしたのも、語る上で力になっています。

毎年4月下旬、ユーラシア大陸の果ての遅い春を思い描く。ウワミズザクラが咲くというその地の人々と自然への思いが、人類の未

来というスクリーンを前に、投影される。

つたない語りが、人と人を結ぶことにつながればとの思いで、これからも機会があれば語ってゆきたいと思っております。

(NPO 法人 語り手たちの会 会員)

つながりたい命 吉沢 直樹

チェルノブイリ 23 周年救援企画 in 名古屋 4/29

スタートしたのは、2008 年 11 月だった。市民手作りの企画で、キーワードは「つながるいのち」、これは第一回実行委員会で決定した。出演者を誰にするか、みんなが候補を出し、それぞれ担当を決めて出演交渉。あまりにもスムーズで実行委員の人脈に驚くとともに、出演者の心いきも伝わってきた。

松本道子バレエ団に子どもたちの出演を依頼、「チェルノブイリの祈り」(スベトラーナ・アレクシェービッチ著)の朗読を「ちいちゃん田んぼ」さんにという提案に、私自身も期待した。

私の担当は、ルーテル教会牧師で「原子力行政を問い直す宗教者の会」世話人「浜岡原発を考える静岡ネットワーク」役員であり「危険でも動かす原発」の著者内藤新吾さん。私は彼の担当になったことで反核非核関係の本を読みあさった。

数回の実行委員会と 29 日前日まで交された 1000 通近いメールで実行委員相互のコミュニケーションも硬い絆に育った。

つながる命を考えていると、必ず赤ん坊がいて成長があるんですよ。そのサイクルは、数百万年に渡って続いてきた。原発が 55 基あるが赤ん坊は大丈夫かと思ってしまう。5 月 18 日 4 時、フランスから使用済み核燃料が返されて御前崎港に。浜岡原子力発電所にプルサーマル計画の MOX 燃料だ。理由は、核兵器を持ちたい人々がいつでも造れるようプルトニウムを蓄積したいためだ。

私が若い時、保育園の潮干狩りで出会ったお母さんの姿がいまでも胸にあります。お二人の障害児を前に後ろに背負い参加しておられた。もちろん、彼らは貝を採ることもなく浜

でどろんこになりキャッキャッ言っていた。その情景こそ、私の生きる原点である。いつの日か、地球の上のすべての核がたたくさんのお金をかけ廃棄されるように、その担ぎ手の一員でありつづけたい。そんな私の気持ち、それは「つながりたい命」。

(チェルノブイリ 23 周年救援企画 in 名古屋 実行委員長)



広河隆一最新チェルノブイリ報告会

4/20 文京シビックホール 参加者の感想

○こんなに長い時間しっかりと説明してくれるのかとびっくりしました。そういえばチェルノブイリってあったなあ程度だったので改めて知っておかなくてはならない現実だと思いました。○結婚式で食事を断る場面が印象的だった。悲劇が長く続いているのに今日のような機会がないと日々の生活に追われ考えることもない。貴重な機会である。

○人に視点を置いた報告は大変興味深く聞かせていただきました。報告に徹することでより強いメッセージを持ったと思いました。

○石川さん、須山さんのコンサートはとても心にしみるものでした。広河さんの講演で、23 年という年月は子どもが母親になってまた子どもへと命が引き継がれる年月です。ますます健康状態が悪くなっているという報告はつらかったです。

○マスコミでは報道されない、偽りのない事実を知ることができ感謝です。「事実を知ろう」とする姿勢がこれからの私たちに必要だと改めて思いました。

<写真展の感想>

●“チェルノブイリの祈り”の朗読は心を打った。そこまでできる愛の深さに感動した。プリピャチ村の観覧車の写真が印象的だ。

●被曝問題は過去のものと考えてしまいがちですが、今も被害は続いていて、生まれてくる子どもたちにも影響が出てしまうことを初めて知りました。

※紙面の都合で少ししか感想を掲載できませんが、基金のHP「最新情報」で全文を掲載しています。

※4.20 行われた東京のイベント、1 部ピアノ & 詩の朗読、2 部広河講演、合わせて約 2 時間の DVD あります。ただし未編集のままです。ご希望の方には実費にておわけします。事務局まで。

ウクライナ政府から児童健康回復貢献で表彰 ウクライナ医学アカデミーからも感謝状

ウクライナ政府表彰委員会の決定（2009.4.21）により、「チェルノブイリ子ども基金」に、表彰状とメダルが授与されました。

さらに、ウクライナ医学アカデミーからは、先ごろ贈呈した超音波診断機や薬剤の支援に対して、感謝状が贈られました。これらの授与は、全国の支援者・団体のみなさまの日頃の支援があつてのことです。感謝の気持ちを持ちまして、みなさまにご報告いたします。

以下は、現地で授与された鈴木理事長からの報告です。

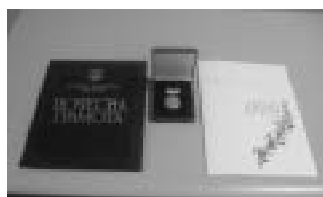


来春（3.31-4/6 ダダ・横浜）の水彩画個展に出品する絵を画くために、ウクライナ・キエフに行っていました。

その滞在中、チェルノブイリ事故のあった4月26日「子ども基金」支援先の「チェルノブイリの子どもたちの生存」の催しを見聞し、同29日には、ジャイカ主導のウクライナ日本センター・セミナーで、「子ども基金の活動」の話しをすることが決まっていた（日本センターは、ジャイカと国立キエフ工科大学との協働事業です）。

その日、その時まで、知らされることがないままに、「子ども基金」に、2つの栄誉が与えられました。

26日「生存」の催し会場の壇上で、セルゲイ・パシンスキーウクライナ国会議員からチモシェンコ首相署名の表彰状とメダルを、29日



ウクライナ政府からの表彰状とメダル。医学アカデミーからの感謝状

日本センター会場では、内分泌代謝研究所のマルコフ医師から医学アカデミーの感謝状が、授与されました。

返礼のあいさつで「基金顧問、フォト・ジャーナリスト広河が、先月こちらで取材をしました。被害は収まっています」、そして最後に、「今後とも、子どもたちの生存・ザクレフスカヤ代表と協力して支援を続けたい」、と結びました。

席に戻り、会場に私と一緒に招かれていた日本センター職員が、驚き顔で迎えてくれました。後日、現地でお世話になっているウクライナ人も大変喜んでくれました。そして、日本に戻り、日が経つにつれ、授与の重みをひしひしと感じています。（鈴木 稔）

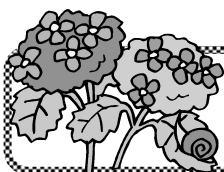


記念コンサート前の授与式（2009.4.26）

左から、表彰を同じく受けたスペインのディアゴ・ソレアス・モロ氏（毎夏、子どもたちの保養を受け入れている）、ザクレフスカヤ「生存」代表、セルゲイ氏、返礼の挨拶をする鈴木、通訳のスペトラーナさん



キエフの水彩スケッチ
（「フレッシュチク」）



若い家族の保養

報告 佐々木 真理

甲状腺手術を受けた 親と子どものための保養

ベラルーシ 5/18～5/29 (写真右)

「子ども健康回復センター“希望21”」

今年で2回目になるこの保養には、8家族19人(3歳の子ども5人、4歳の子ども3人)が参加しています。母親は全員過去に甲状腺がんの手術を受けています。滞在中はそれぞれの症状によりマッサージや温熱療法を受けました。また、センターの専門職員による子どもたちのための遊びの教室、親たちのための体操の教室・健康の知識が得られる教室、親子で参加できるスポーツ大会などが開かれています。健康に配慮された3回の食事の他に、果物やジュース、お菓子なども配られます。参加者はみんな大変満足しています。気管支炎の3歳の男の子は、保養に参加してから症状がよくなったとのこと。子どもころ甲状腺がんの手術を受けたひとりの母親は乳腺の手術を受け、今後も検査が必要です。また彼女の子どもは先天性の病気のため視力が悪く、目の手術を受ける準備をしているところです。

現在センターには、これらの家族の他に290人(子ども270人と20人の引率者)が滞在しています。全員がゴメリ州の汚染地域(モズィリ、レリチツァ、ログアチョフなど)から来ています。(2009. 5.27)

腫瘍病の子どもたちのための保養

ベラルーシ 6/9-7/2

「子ども健康回復センター“希望21”」

現在センターでは400人以上の子どもたちが滞在しています。その中で、子ども基金のプロジェクトが行われており、8歳から17歳までの、甲状腺がん・脳腫瘍の手術後の子ども、白

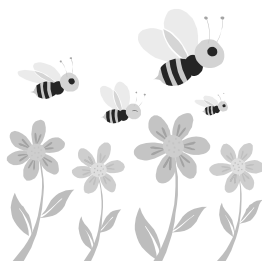


血病、腎臓病、肝臓病、先天性の目の病気など、さまざまな病気の子ども33人が参加しています。6/10には医師による健康診断が行われ、翌日からそれぞれの症状に合わせた治療プログラムが行われています。子どもたちを診断した医師は「参加しているのはみんな健康回復の必要な子どもたちばかりです。毎年子どもたちの保養を支援してくれる日本の人たちに本当に感謝しています」と話していました。センター職員による催し物やさまざまな教室も始まっています。今日(6/12)からは、私が開催する日本の教室も始まりました。詳しくは、次号ニュースで報告します。(2009. 6.12)



※ウクライナでも間もなく夏の特別保養が始まります。今年は初めての保養施設ザカルパチヤ州の“ゴルチス”というところを利用します。ウクライナの慈善団体「チェルノブイリの子ども

たちの生存」に所属する腫瘍病の子どもたち30人(付き添い4人含む)が15日間滞在の予定です。こちらも次号で報告します。





里親のページ

里子の手紙

親愛なる Yさんと
ご家族 みなさんへ

ご支援に心から感謝しています。現在のところニキータの体調は安定していて、学校に通っています。家では、お気に入りのネコのムーリヤが、ニキータの帰りを待っています。11月の初めに、ニキータは定期検査を受けに、ミンスクの病院へ行ってきました。検査結果は、正常値であることがわかりました。1月の終わりには、義眼の交換に行きます。

私たちの住んでいるところはとても美しいところです。家の隣には松林があり、少し離れたところにはプリピャチ川が流れています。町から数キロのところには湖もあります。チェルノブイリ事故さえなければ、休養のための場所としては天国のようなところだったのです。森にはきのこやイチゴ類が豊富にありますし、湖には魚が豊富です。でも、私たちはそこではもうきのこ狩りもイチゴ狩りもしません。

休みの日には森を散策します。夏には川や湖のほとりで過ごします。いろいろな音楽を聴いたり、テレビやビデオを見たりするのも好きです。

Yさんとご家族のみなさんに、心よりクリスマスと新年のお祝いを申し上げます。みなさんのご健康と幸せ、経済的安定、そして大地の恵をお祈りします。

尊敬と愛をこめて

ニキータと家族より



親愛なる Hさんへ

こんにちは。ベラルーシのワレーラよりお便りをさしあげます。

こちらは変わりありません。僕と妹のイリーナは学校に通っています。3月の終わりには春休みがあります。僕たちはよく勉強しています。冬に少し風邪をひきました。病院にはしょっち

ゅう行っています。検査の結果は問題ありませんでした。

最近、妹とおばあちゃんの誕生祝いをしました。おばあちゃんの誕生日は、パパとママの結婚記念日でもあります。

あなたが僕たちのことを忘れずにいてくださることに感謝しています。ご健康とご多幸をお祈りしています。

お手紙を楽しみに待っています。

あなたのベラルーシの友だちより

2009年3月20日

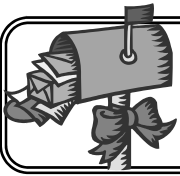
里親募集中

今、6人の里子候補がいます。そのうち、3人の里親はみつかりました。残り3人の里親を募集しています。1か月50ドル（プラス経費1割）を最低2年間支援していただきます。ご関心のある方には資料をお送りします。事務局までご連絡ください。
＊お手紙の翻訳をご希望の方は遠慮なくお申し出ください。

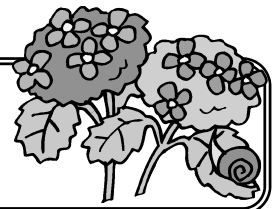
三つ折りパンフレットを宣伝のお願い！
新しい三つ折りパンフができました。ニュースと共に、今回、同封しています。



デザインはいつもお世話になっている“スタジオ・ギブ”さんです。カラーで、表紙と裏表紙の写真は広河さんが3月撮影された最新版です。イベントや集会の際に配布していただけたら幸いです。



ミンスク便り



ベラルーシの人々の健康に対する考え方や習慣については、日ごろから気になることも多く、これまでに何回か触れてきましたが、今回は現在、世界を揺るがしている新型インフルエンザをめぐる状況をお伝えしたいと思います。

5月末の段階で、ベラルーシでの新型インフルエンザ感染の事例は、疑いのあるものも含めてありません。すでに隣国ロシアやポーランド、ウクライナで感染確認例が出ており、地図で見るとベラルーシはほとんど陸の孤島のように見えます。ベラルーシは、鳥インフルエンザの感染例も未だ無く、ヨーロッパにあっても少数派なのです。

日本は新型インフルエンザ発生のニュースに対し、世界の中でも最も敏感に反応した国の一つであり、感染予防措置も充分過ぎるほどとられているようですが、ベラルーシはその対極にあります。ロシアやウクライナなど隣国が迅速に予防措置をとったのに対し、ベラルーシではこれといった対策はとられなかったようです。そもそも、日本ではそれまですでに、新型インフルエンザやパンデミックの危機が叫ばれ、そうした状況を題材にしたドラマ等も制作されていましたが、こちらでは、新型インフルエンザという言葉自体、耳にすることがほとんどなかった気がします。

世界各国から毎日直航便で大量に人の出入りがある日本に比べれば、感染のルートは限られるかもしれませんが、何と云ってもヨーロッパは陸続き。「ヨーロッパの中心」にある（地理的には、確かに）と言うとおり、陸路でベラルーシを通過するヒトやモノの流れは無視できないはずです。増してや周辺国では感染事例が確認されており、いつ感染者が発生してもおかしくない状況にあるのです。感染が確認された国々からの豚肉輸入が停止され、モニタリングなどインフルエンザの予防対策は平素から行われているから大丈夫、と当局は強調しています

が、これがどこまで通用するのかは疑問です。

意外と言っては何ですが、新型インフルエンザ治療に効果があるとされる「タミフル」はミンスクでも市販されています。10錠入り一箱が3,000円台と、こちらの感覚ではかなり高価なものであるため、買い求める動きはない、とニュースでは伝えていました。日本ではタミフルの副作用を心配し、服用には慎重ですが、こちらでは処方箋無しで購入可能です。もう一種類の薬「リレンザ」は、売られていないようです。マスクについては、元々する習慣がない国柄、調べてはいないのですが、少なくとも日本の素晴らしい3Dマスクのようなものは入手不可能と思われます。当然ながら、町中でマスクをしている人は皆無です。

日本のニュースでは、学校で子供たちに手洗い・うがい指導などを行う様子が流れていましたが、ベラルーシの学校では、新型インフルエンザについて何のコメントもなかったようです。考えてみると、普段から学校では歯磨きなども含め、これといった衛生指導はありません。日本の小学校では「保健係」なる役割があり、ハンカチ、ちり紙の携行と爪が切っているかを調べていましたが（今もあるのでしょうか?）、今思い出してみると、随分すごいことだったのだと思います。

日本の報道ぶりは、はたから見ても明らかに行き過ぎ、まるで新型インフルエンザの拡大をイベントに仕立て上げている感すらあります。それに対しベラルーシは、市民をいたずらに刺激することがないよう、意図的に冷静な対応をしているのかもしれませんが、ただ、いざという事態になった場合、情報の不足から人々が混乱に陥り、流言に惑わされたりしないかが心配です。とにかく、ドラマで見たような恐ろしい事態が現実にならないよう、願うばかりです。

（花田朋子 ミンスク在住）

黒部ドクターのお話



新型インフルエンザ騒ぎ

今回の新型インフルエンザは、在来のH1N1型の変異種であり、メキシコで始まりました。メキシコで死者が出たので騒がれましたが、メキシコではアメリカの進出企業による養豚が行われ、公害垂れ流しの養豚場がある州から始まっているようです。詳細は報道されていません。

しかし、人口の三分の一を占めると言われる「貧困階層から発病者、死者が出ている」と、毎日新聞「記者の目」欄にメキシコ駐在記者の記事があります。離農者が集中しているメキシコ市は2千万人の都市で、スラムも大きく、発病者はメキシコ市とその隣の3州で90%を占め、死者もそこに集中していました。また離農したメキシコ人がアメリカとカナダに入国を続けているために、アメリカとカナダにも広まったと考えられます。

インフルエンザウイルスは、毎年小変異し、10年前後で中変異し、30～40年に大変異をするとされています。今回は小から中の変異で、メキシコにかなりの死者が出たために騒がれたのですが、メキシコ政府は約2か月で終息宣言を出しました。

日本政府の対応は過激で、できもしない水際作戦や濃厚感染疑い者の隔離収容などをして、マスコミと共に危機意識を煽り、その行き過ぎに対する国民の反応に驚き、慌てて麻生首相を使ったテレビコマーシャルで沈静化を図るなど醜態でした。しかも、肝心の「新型」インフルエンザに感染して発病する率が15～35%であることは報道されていません。

ワクチンやタミフル騒ぎも、元々インフルエンザワクチンは効かない（有効率20～30%）し、する必要もないのです。新型も同じです。抗がん剤と同じで、効いたら儲けもの程度です。

海外ではしていない「マスク、手洗い、う

がい」などもマスコミが競って、知ったかぶりをする学者を使つての報道などで、マスクが品切れになったりしました。

テレビでの報道を見ると、流行中のメキシコ市でマスクをしている人が見られません。

マスクは発病した人が、大量にばら撒かないためにするエチケツトマスクで、予防的効果はありません。メキシコ在留の企業は、日本人第1号を出さないことに必死で帰国させましたし、日本人第1号とされた高校生の通う高校の校長は、そうではなかったことに涙を流して喜びました。騒ぎの風評被害です。結局、日本国内にも感染発病者を出しましたが、2週間で世界に広がり、各地ごとに1～2か月で終息していくという私の予測通りでした。

インフルエンザは、通常かかっても3日前後の発熱とその後、半数の人の長びく咳を経れば自然に治る病気ですから、ワクチンもタミフルも要りません。

病気になるのは、休息せよとの自分の身体のアピールと考えて下さい。そうすれば、騒ぐ必要ありません。数日つらくたって、癌よりは、一時をしのげば済みます。死ぬのは、低所得者層、高齢者、慢性呼吸器疾患を持っている人、妊娠中毒症のある妊婦などの人たちです。またその不健康を作っている日本の社会が問題なのですが、そこが話題にされていません。

メキシコの新型インフルエンザの被害者は、母子家庭や低所得者層に多く、これはチェルノブイリの被害者と同じです。健康で普通の生活をしている人は、かからないか、かかってでも軽く済みます。過労とストレスが最大の敵。ウイルスではありません。

黒部信一x：吹上共立診療所所長 小児科医師



チェルノブイリ事故 23 周年関連 現地ニュースから

◇チェルノブイリ原発事故から 23 年が経ち、ウクライナ政府は、チェルノブイリ被災者のことを忘れることに決めたようである。少なくとも、非常事態省内では、汚染ゾーンの縮小について話し合われている。それによると、第 2 汚染ゾーンは、86 の居住地点 [市や村などの行政単位] を 44 に、第 3 汚染ゾーンは 841 から 357 に、第 4 汚染ゾーンは、1290 から 337 に減らすことが検討されている。(以下略)

forUm(ウクライナ) 2009/4/24

◇ベラルーシのルカシェンコ大統領は、2 日の日程で国内の放射能汚染地域を実務訪問し、ベラルーシは、チェルノブイリの問題解決に関して、被災地の回復からその積極的な復旧、開発へと新たな段階に移行しつつあるとの考えを示した。訪問 2 日目の 25 日、大統領は、ゴメリ州ブラーギン地区コマリン町を訪れ、春の農作業の状況などを視察した。その際、大統領は、事故によりベラルーシが受けた物質的損害は、第二次世界大戦時の被害に匹敵すると指摘した。それによると、戦争ではナチス軍により国内 619 の村が消失したが、チェルノブイリの事故では 485 が失われた。またブラーギン地区では、居住地の 42% が失われ、住民が 40% 減少したという。

(略) **ベルタ (ベラルーシ国営) 通信 2009/4/25**

◇ウクライナには、公式データによると 2 百万人以上の「チェルノブイリ被災者」が住んでいるが、その多くは、自身の置かれた状況に満足していない。今日、正午からキエフ市内中心部の通りと広場でデモ行進と集会が開かれる。

ラジオ「モスクワのこだま」(ロシア) 2009/4/25

◇ウクライナのティモシェンコ首相は、27 日、キエフ州カガルリク市の住宅落成式に出席し、チェルノブイリ事故被災者用住居の鍵の引渡しを行う。政府は、2008 年度の原因事故被災市民への住宅補償費として安定化基金から 1670 万グリヴナ(約 219 万ドル)を拠出した。政府はこの予算により、カガルリク市

にチェルノブイリ被災者のための住居 40 戸を用意することを決めている。

UNIAN 通信 (ウクライナ) 2009/4/26

◇ベラルーシ国内の放射能汚染の状況は、チェルノブイリ事故直後の 1986 年の状況よりもさらに深刻である。ベラパン通信によると、ベラルーシ共和国科学アカデミー準会員のイワン・ニキトチェンコ教授は、抗議活動「チェルノブイリの行進」の枠内で、科学アカデミー本部前で開かれた集会の冒頭、このように語った。(略)

DATE.BY(ベラルーシ) 2009/4/26

◇ロシアの有名な環境学者で、リベラル政党「ヤブロコ」の会派「緑のロシア」を率いるアレクセイ・ヤブロコフ氏は、インターファクス通信に対し、「チェルノブイリ事故の影響は、あと 150 年は認められるだろう。これは 7 世代にわたる」と語った。さらにヤブロコフ氏は、当局は、この事故の影響について口を閉ざすようになっていると指摘し「実情を示す科学データは、公表されていない。影響は、原子力関係者たちが口にしていないよりも、はるかに深刻なものである。彼らは、チェルノブイリのことは忘れるように求めている。しかしチェルノブイリを忘れることは許されない」と話す。(略)

NEWS.ru (ロシア) 2009/4/26

※以上翻訳はボランティアの平野さん

子ども基金 H P 「最新情報」に全文を掲載します。

////////////////////////////////////

◆事故当時、チェルノブイリ原発で働いていた技術者の興味深い証言が、京都大学・今中哲二さんの訳で紹介されています。

「**チェルノブイリ事故現場での数日間の個人的な体験**」ニコライ・カルパン、今中哲二訳
＜科学・人間・社会 2009 年 2 号＞

<http://www.rri.kyoto-u.ac.jp/NSRG/cher-index.html>

↑この中の【事故の概要】からご覧ください。

チェルノブイリの歌声

拝啓 風薫るさわやかな季節となりました。
チェルノブイリ子ども基金の皆様には、いかがお過ごしでしょうか。私たちは、修学旅行を終え、元気に授業や部活動に励んでいます。
さて、過日はお忙しい中、私たちの国際理解学習にご協力いただきましてありがとうございます。
お蔭様で、事前学習では分らなかった様々なことを学ぶことができました。

まず、一番おどろいたことは、原発事故による被害の大きさとその威力です。被害者の多さにはおどろきました。

次におどろいたのが今でも病気とたたかっている人がいるということです。その事実には悲しみが込み上げてきました。

これから国際理解のまとめをするにあたり、参考にさせていただきます。（後略）

5月13日

福島市立清水中学校 第3学年1組 Oさん他4名

.....

（前略）

この度、私共、宇都宮友の会ではチェルノブイリ原発事故で被曝し、来日後日本で音楽活動しながら平和への思いを伝えるナターシャ・グジーさんを知り、彼女のコンサートを企画して、今年の2月28日に宇都宮文化会館に於いて開催いたしました。当日は子どもたちを含めて多くの方が観賞し、ナターシャさんの歌やメッセージに感動して、感激の言葉を残しました。そして宇都宮友の会として、コンサートの収益金の一部をナターシャさんに関係のある貴「チェルノブイリ子ども基金」に寄贈することにいたしました。どうぞ子どもたちのためにお役立て下さいますようお願い申し上げます。（後略）

3月24日

宇都宮友の会 Nさん

☆ナターシャさんのコンサート開催等についてのお問い合わせ先

オフィスジルカ Tel/Fax 03-3692-9751

e-mail: info@office-zirka.com

.....

本日皆様にご多忙の中、この報告会に出席して下さいましたこと、誠に感謝申し上げます。

人的分野における日本とウクライナの両国間の実り多い一例である本日の報告会に、メッセージをお届けできることは私にとって光栄の至りでございます。

今からちょうど23年前にチェルノブイリの惨事が起きました。その事故の影響は数十年ではなくて、数百年間、残念なことに続いてしまうであろうほどの大きな事故でした。

チェルノブイリ事故と広島・長崎の原爆投下については、しばしば比較されますが、どちらも核エネルギーの使用により、人間を死亡させる、ということにつながります。

チェルノブイリ子ども基金が慈善団体として、事故の被害を受けた子どもをはじめ、ウクライナ人の人々に対して、長年にわたり、無償資金援助、そして精神的な援助を与えてくださっていることに感謝の意を表します。

駐日ウクライナ大使 ミコラ・クリニチ

（※4月20日に行われた東京の講演会場に寄せられたメッセージ。一部）

.....

在日ベラルーシ共和国大使館はチェルノブイリ子ども基金に対し敬意を表するとともに、1986年4月26日チェルノブイリ原子力発電所で起こった事故から23年を迎えるにあたって、汚染地域の国際的な復興活動に貴団体が継続的に関わってくださっていることに心から感謝申し上げます。あなた方の医療および人道支援はチェルノブイリ事故の被害を最小限に抑えるのに大いに役立ったと確信しております。ベラルーシと日本でおこった惨事の相互理解をベースに両国の友好関係を一層深めていきたいと願っております。チェルノブイリ子ども基金とのさらなる協力関係を期待しております。2009/4/17

（※毎年ベラルーシ大使館から寄せられているメッセージ。一部）

事務局から

★チェルノブイリ事故 23 周年目の 4 月イベント・東京では、石川逸子さんによる朗読、須山真玲さんのピアノ演奏、そして広河隆一チェルノブイリ最新報告会を行いました。平日しかも月曜日の夜にもかかわらず、約 300 人のかたにご来場いただきました。アンケートに答えてくださった方は 60 名、そのうち 48 名の方が子ども基金のイベントは初めてとのことです。紙面の都合によりほんの少ししか掲載できませんでした。

★今回抜粋として載せた「アンケート」「ウクライナ大使あいさつ」「ベラルーシ大使館あいさつ」「チェルノブイリ関連現地ニュース」「ニコライ・カルパンさんの証言」など、できるだけHPでご覧いただけますよう、アップしたいと思っています。パソコンを使われない方で、プリントした全文が欲しい方には、実費でお送りいたします。どうぞご連絡ください。

★石川逸子さんの本・販売中

4 月に著書を寄贈していただき、イベントのときに販売しました。その残部があります。ご希望の方は事務局まで。

『ぼくは小さな灰になって』(共著)1200 円 西田書店

『定本 千鳥ヶ淵へ行きましたか』1200 円 影書房

『オサヒト覚え書き』3800 円 一葉社

特別に送料込みの価格です。

★2010 年度カレンダー、準備中

今年 3 月の取材のときに、広河さんは 17 年ぶりにニーナ先生と会いました。かねてよりニーナ先生を中心としたカレンダーを、という声があり、ようやく実現できそうです。ニーナ先生と家族と地域の様子と、そのほかウクライナの最新撮影の写真も入れて、24 周年救援カレンダーを制作します。ご期待ください。次号で予約を募ります。

★今回の同封物

三つ折りパンフレット、写真展事務局機関紙、この 2 つ以外は基金関係者が関わっているイベントです。

a) 103 NO NUKES FESTA 2009 〜放射能を出さないエネルギーへ
10 月 3 日 明治公園(東京)

広河さんも呼びかけ人の一人で、子ども基金も賛同団体に名を連ねています。[全国対象]

b) 横浜国際フォトジャーナリズムフェスティバル

9 月 30 日〜10 月 11 日 横浜赤レンガ倉庫 [関東圏対象]

c) 終焉に向かう原子力 (第 8 回)

反原発・反再処理工場 74 講演と映画の集い

7 月 4 日 明治大学リパティタワー1001 教室(東京)

※対象は関東圏ですが、「六ヶ所村ラブソディー」の映画チラシを使用しており、全国のみなさまに見ていただきたい、との希望が主催者よりありましたので、全国に同封させていただきました。

◇ニュース発送“ボランティア募集”

9 月 12 日(土)1 時〜5 時 場所：東京ボランティア・市民活動センター 会議室 C (通称ぼらせん：飯田橋駅ビル セントラルプラザ 10 階) 発送作業を手伝っていただける方を募集しています。少しの時間でも歓迎です。参加される方は事前にメール、FAX、電話でご連絡下さい。

T/F 03-5228-2680

◇ボランティア作業日について

毎月第 1・3 土曜日の 1 時半〜5 時半 ボランティアの方と作業を行っています。作業日を変更する場合もございますので、参加される方は前日までにご連絡ください。事務局への電話は平日午前 10 時〜午後 5 時半の間に、留守の場合は伝言をお願いします。8 月の作業は休みです。

◇振替用紙について

振替用紙を事務作業の都合などにより、一律に同封させていただいております。決して募金を強要するものではありません。

◇15p 募金・救援状況 補足

団体名一覧に：松本道子バレエ団

[定額給付金]からのカンパです、と振込用紙に書かれたご寄付を複数の方よりいただきました。

みなさまありがとうございました。



発行人●チェルノブイリ子ども基金 鈴村稔 ● 発行日 2009 年 6 月 27 日 (年 4 回発行)

〒162-0816 東京都新宿区白銀町 25 メゾンド原 207 号室 Tel/Fax 03-5228-2680

郵便振替口座 「チェルノブイリ子ども基金」 00160-4-98316

ウェブサイト=<http://www.smn.co.jp/chno/index.html> e-mail: chno1986@tokyo.email.ne.jp